

春期福音特別集会（1）（京都）

預言者の心

――イザヤ書第1～4章――

1983年6月5日

小池辰雄

天よきけ かれらは我にそむけり 傍若無神 エホバの言をきけ 雪のごとく白くなせ 義し
き審判と義 帰り来るもの 審判によって贖われる 預言者の心 聖霊の権威 遣れる者 エ
ン・クリスト 祈り

【イザヤ1】

1 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのとき
に示されたるユダとエルサレムとに係る異象。

2 天よきけ地よ耳をかたむけよ、エホバの語りたもう言あり。曰く、われ
子をやしないて育てしにかれらは我にそむけり。3 牛はその主をしり驢馬は
そのあるじの厩^{うまや}をしる。然どイスラエルは識^{しらず}ず、わが民はさとらず。4 ああ
罪をおかせる国人、よこしまを負うたみ、悪をなす者のすえ、壊^{やぶ}りそこなう
種族、かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退
きたり。5 なんじら何ぞかさねがさね悖^{もと}りてなおうたれんとするか。その頭
はやまざる所なく、その心はつかれはてたり。6 足のうらより頭^{かしら}にいたるま
で全きところなく、ただ創^{きず}痕と打傷^{うちきず}と腫物とのみなり。而してこれを合^あわす
ものなく包むものなく亦あぶらにて軟^{やわ}らぐる者なし。7 なんじらの国はあれ
すたれ、なんじらの諸^{まち}邑は火にてやかれ、なんじらの田畑はその前^{あたし}にて外人^{あだし}
にのまれ、既にあだし人にくつがえされて荒れ廃れたり。8 シオン^{むすめ}の女はぶ
どうそのの庵^{いおり}のごとく瓜田^{うりばた}の仮舎^{かりや}のごとく、また囲^{かこ}みをうけたる城のごとく、
唯だひとり遺れり。9 万軍のエホバわれらに少しの遺^{のこ}りをとどめ給うことな
くば我等はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん。

10 なんじらソドムの有司^{つかさど}よ、エホバの言をきけ、なんじらゴモラの民よ、
われらの神の律法に耳をかたむけよ。11 エホバ言いたまわく、なんじらが獻
ぐるおおくの犠^{いけにえ}牲はわれに何の益あらんや。我はおひつじの燔祭とこえたる
けものの膏^{あぶら}とにあげり。われは牡牛あるいは小羊あるいは牡山羊の血をよろ
こばず。12 なんじらは我に見えんとてきたる。このことを誰がなんじらに要^{もと}
めしや。徒^{いたず}らにわが庭をふむのみなり。13 むなしき祭物^{そなえもの}をふたたび携^もうるこ



となかれ。燻物^{たきもの}はわがにくむところ、新月および安息日また会衆をよびあつむることも我がにくむところなり。なんじらは聖会に悪を兼ね。われ容すにたえず。14 わが心はなんじらの新月と節会^{せちえ}とをきらう。是わが重荷なり。われ負うにうみたり。15 我なんじらが手をのぶるとき目をおおい、汝等がおおくの祈禱^{いのり}をなすときも聞くことをせじ。なんじらの手には血みちたり。16 なんじら己をあらひ己をきよくし、わが眼前よりその悪業^{あしわざ}をさり、悪をおこなうことを止め、17 善をおこなうことをならい、公平をもとめ、虐げらるる者をたすけ、孤子^{みなしご}に公平をおこない、寡婦^{やもめ}の訟^{うったえ}をあげつらえ。

18 エホバいいたまわく、いざわれらともに論らわん。なんじらの罪は緋のごとくなるも雪のごとく白くなり、紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん。19 若しなんじら肯いたがわば地の美産^{よきもの}をくらうことを得べし。20 もし汝等こばみそむかば剣にのまるべし。此はエホバその御口よりかたりたまえるなり。

21 忠信なりし邑^{まち}いかにして妓女^{うかれめ}とはなれる。昔は公平にてみち正義その中にやどりしに、今は人をころす者ばかりとなりぬ。22 なんじの白銀は滓^{かす}となり、なんじの葡萄酒は水をまじえ、23 なんじの長輩^{おさたち}はそむきて盗人の伴侶となり、おのおの賄賂^{まいた}をよろこび、臍財^{おくりもの}をおいもとめ、孤子^{みなしご}に公平をおこなわず、寡婦^{やもめ}の訟^{うったえ}はかれらの前にいづること能わず。

24 このゆえに主万軍のエホバ、イスラエルの全能者のたまわく、ああわれ敵にむかいて念^{おもい}をはらし、仇にむかいて報いをすべし。25 我また手をなんじの上にそえ、なんじの滓^{かす}をことごとく浄くし、なんじの鉛をすべて取り去り、26 なんじの審士^{ひきかへし}を旧のごとく、なんじの議官を始めのごとくに復すべし。然るのちなんじは正義の邑忠信の邑となえられん。27 シオンは公平をもてあがなわれ、帰り来るものも正義をもて贖^{きだ}わるべし。28 されど愆^{とが}をおかすものと罪人とはともに敗れ、エホバをすつる者もまた亡びうせん。29 なんじらはその喜びたる檀樹^{かしのき}によりて恥をいだき、そのえらびたる園によりて慙^{はじあから}赧^{いさかい}むべし。30 なんじらは葉のかるる檀樹のごとく、水なき園のごとくならん。31 権勢^{いさかい}あるものは麻のごとく、その工^{わざ}は火花のごとく、二つのもの一同もえてこれを撲滅^{うちけ}すものなし。

【イザヤ2】

1 アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかかる言。2 すえの日にエホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅く立ち、もろもろの嶺^{みね}よりもたかく挙がり、すべての国は流れのごとく之につかん。3 おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、



神われらにその道をおしえ給わん、われらその路をあゆむべしと。そは律法はシオンよりいでエホバの言はエルサレムより出づべければなり。⁴ エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯てかれらはその剣をうちかえて鋤^{すき}となし、その鎗^{たて}をうちかえて鎌となし、国は国にむかいて剣をあげず、戦^{たたか}いのことを再びまなばざるべし。

⁵ ヤコブの家よ、きたれ我らエホバの光にあゆまん。⁶ 主よなんじはその民ヤコブの家をすてたまえり。此はかれらのなかに東のかたの風俗^{ならわし}みち、皆ペリシテ人のごとく陰陽師^{おんよう}となり、異邦人のともがらと手をうちて盟^{ちかい}をたてしが故なり。⁷ かれらの国には黄金白銀^{こがねしろがね}みちて、財宝^{たから}の数かぎりなし。かれらの国には馬^{うま}みちて戦車^{いくさぐるま}のかず限りなし。⁸ かれらの国には偶像^{がま}みち、皆おのが手の工^{わざ}その指のつくれる者をおがめり。⁹ 賤^{いや}しきものは屈^かめられ、尊^{たか}きものは卑^{ひく}せられる。かれらを容^{ゆる}したもうなかれ。¹⁰ なんじ岩間^{いわま}にいり、また土にかくれて、エホバの畏るべき容貌^{みかたち}とその稜威^{みいつ}の光輝^{かがやき}とをさくべし。¹¹ この日には目をあげて高ぶるもの卑^{ひく}せられ、驕^{おご}る人かがめられ、唯エホバのみ高くあげられ給わん。……¹⁷ この日には高ぶる者はかがめられ、驕^{おご}る人はひくくせられん、唯エホバのみ高くあげられ給わん。

¹⁸ かくて偶像^{がま}はことごとく亡^なびうすべし。……²² なんじら鼻より息のいでいをする人に倚^よることをやめよ、斯^{しか}るものは何ぞかぞうるに足らん。

【イザヤ3】

¹ みよ主ばんぐんのエホバ、エルサレムおよびユダの頼むところ倚^よるところなる凡てその頼むところの糧^{さばき}、すべてその頼むところの水、² 勇士^{ますらお}戦^{いくさ}士^{さび}審^さ士^し預言者^{うらないしや}、卜筮^{うらなひ}者^{しや}長老^{ちやう} ³ 五十人の首^{かしら}貴^{とう}顕^{とく}者^{もの}議^ぎ官^{くわん}、芸^{たけ}に長^{なが}たる者および言語^{ことば}たくみなるものを除きたまわん。⁴ われ童子^{わらわ}をもてかれらの君^{きみ}とし、嬰兒^{みどりご}にかれらを治めしめん。……

¹² わが民はおさなごに虐^{いじめ}げられ、婦女^{おんな}におさめらる。ああわが民よ、なんじを導くものは反^{かえり}てなんじを迷^{まよ}わせ汝^{みづか}のゆくべき途^{みち}を絶^たつ。……

【イザヤ4】

¹ その日七人のおんな一人の男にすがりていわん、我らおのれの糧^かをくらひ己のころもを着るべし、ただ我らになんじの名をとなうることを許してわれらの恥^{はにか}をとりぞと。² その日エホバの枝はさかえて輝^{かが}かん。地よりなりいずるものの実はすぐれ並^{また}うるわしくして逃^にれのこれるイスラエルの益となるべし。³ 而してシオンに遣^なれるものエルサレムにとどまれる者すべて此等のエルサレムに存^{ながら}うる者のなかに録^{ろく}されたるものは聖^{せい}となえられん。⁴ そは主さばきするみたまと焼^やきつくす霊^{みたま}とをもてシオンのむすめらの汚^{けが}を



あらいエルサレムの血をその中よりのぞきたもう期^{とき}きたるべければなり。
5 爰^{ここ}にエホバはシオンの山のすべての住所^{すまい}ともろもろの聚会^{あつまり}とのうえに昼は雲と煙とをつくり夜はほのおの光をつくり給わん。あまねく榮^{さかえ}のうえに覆庇^{おおい}あるべし。6 また一つの仮廬^{かりいお}ありて昼はあつさをふせぐ陰となり暴風^{はやち}と雨とをさけてかくるる所となるべし。

●天よきけ

イザヤ書第1章から入ります。

1 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのとき
に示されたるユダとエルサレムとに係る異象。

「アモツ」というのはどういう人だか分からない。6章で、「ウジヤ」の死んだ時にイザヤは召命を受けたと書いてある。紀元前740年です。イザヤ書は要するに預言集なんです。いくつもある。必ずしも時代順に並べてない。イスラエルやユダやその近隣に対するところのいろいろな預言、それから全世界に対する預言というようなことで、第1章もいくつかの預言が集まっている。これはみな編纂者がそういうようにしたわけです。冒頭に、

2 天よきけ地よ耳をかたむけよ、

とある。これは素晴らしい。普通の詩人はなかなかこれだけのことは言えない。人間に向かって言わないで、

「天よきけ、地よ耳をかたむけよ」

という。申命記32章にも似たような言葉があります、あれは「モーセの歌」とされているところですが。イザヤという預言者は預言者の王ともいわれるので、非常に代表的な預言者です。天地に向かって語りかけている。人間は相手にならん、というほどのことでもないでしょうけれども、非常に嘆いている気持が、この言葉でも分かります。天も地もこの大自然がやはり生き物のように感じているわけです。被造物と言うけれども、単なる物ではない。詩篇149篇あたりも非常にそういうところがあります。アッシジのフランチェスコもそうです。太陽に向かってものを言っている。「太陽の歌」という詩がある。ゲーテさんもそうです。

●かれらは我にそむけり

エホバの語りたもう言あり。曰く、われ子をやしないて育てしにかれらは我にそむけり。

これはエホバの言葉です。「子」は複数です。

「私は子らを養い育てたのに彼らは私に背いた」

という。今の世の中をズバリ言ったような、日本のいろいろな痛ましい状況が思いあわさ



れます。この一言は非常に重大な一言です。世界の民は、一人ひとりがみな神さまの子らです。せっかく養い育てたのに、自分に背いて不信である。アダム・イブも神の言に背きました。離反ということです。せっかく、子らを育てたのにみな背いて行つたと、エホバの神さまが非常に嘆いておられる。

人類がそのような歴史を繰り返している。そして最後には、神を無みして自ら滅んでいく。自ら審判を招いている。第一次、第二次戦争がそれです。もし、第三次がきたら世界はおしまいです。しかし、事実そういう危機的な状況にあつて、いつそのようなことにならないとも限らない。けれども、どのような事態であつても、我々は神の民として戦つていかなくてはいいかん。神の国を建設していく。このことは決して空しいことではない。必ず成就します。神に参与することは必ず成つていく。

「われ子をやしないて育てしにかれらは我にそむけり」

というこの一言をじっくり読んでいて、私は涙が流れた。人類は背きの歴史をやっている。その現象が戦争や諸々の社会悪、イデオロギーの喧嘩、たくさんさんの偽りなどです。そのことはさんざん預言書の中に書いてある。

3 牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩^{うまや}をしる。然どイスラエルは識^しらず、わが民はさとらず。

原文は全部、詩ですから、

「識^しらず、さとらず」

というふうに対句のような言い方になっている。本当の信頼関係が、信愛関係が崩れてしまった。神さまにとつてはこれくらい痛ましいことはない。また遂には、黙示録では羔羊^{こひつじ}の怒りをささうところのようになります。たつたこの二、三節が一つの預言の詩なんです。非常に短いけれども、何ともいえない深い内容をもっている。

学校で先生と生徒の間が「識る、悟る」ということはみな愛に基づいている。今はすぐ理屈を言つて自己主張する。日本の教育界をみると本当に嘆かわしい。今、日本で一番大事なのは、本当は教育のことです。その土台は絶対に高次な宗教のことになるわけです。宗教は根つこの世界です。教育の世界は幹だけでも、根つこが大事です。教育が単なる教育ではない。

「公立では一定の宗教はいかん」

と言われているけれども、教える人は根底に宗教心を持たなかったら、本当の教えにならない。親子の關係に信愛がなくなつたら、もうお終いです。学校でも師弟でもそう、社長と社員の關係もそうです。組合なんていうものではない。

●傍若無神

4 ああ罪をおかせる国人、よこしまを負うたみ、悪をなす者のすえ、壊^{やぶ}りそ



こなう種族、かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり。

「罪をおかす」「よこしまを負う」「悪をなす」「壊りそこなう」

ということの基は、

「エホバをすてる」

ことがその基です。彼らがエホバをすてたから、そういうことになった。傍若無神、傍ら神無きがごとしということです。今、日本には傍若無神がたくさんいる。

「かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり」と、非常に力強くたたみかけて言っているわけです。

⁵なんじら何ぞかさねがさね悖りてなおうたれんとするか。その頭はやまざる所なく、その心はつかれはてたり。⁶足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創痕と打傷と腫物とのみなり。而してこれを合やすものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者なし。

と、全くしやうがないというわけだ。非常に具体的な表現です。頭の先から足の裏までしやうがない。そういう腐れ果てたような存在だという。預言者の言葉は凄い。こんなことは我々は常識的には語られないですよ、聖書に書いてあるものだから読んでいなければならないけれども。よほどひどかったことでもあるらしい。もうはつきりと滅びをみているわけです。

今の日本も様々の偽りと詭計と策略と誤魔化しと、いろいろなものが渦をまいている。本当の道德教育もなくなってしまった。倫理だとか道德というと、何か昔の話みたいな気持ちでいる。ただ

「社会、社会」

と言っている。何が民主主義か、何が社会主義かと言いたくなる。カントの道德哲学でもしっかりと勉強したらいい。

徹底的に背ける、また罪のかたまりみたいな事態をこれほど具体的に語っているような言い方もちよつと珍しい。

●エホバの言をきけ

⁷なんじらの国はあれすたれ、なんじらの諸邑は火にてやかれ、なんじらの田畑はその前にて外人にのまれ、既にあだし人にくつがえされて荒れ廢れたり。

これは、預言と言いましても、だいぶアッシリヤにやつつけられた後の話です。時代的にはかなり後の方です。

⁸シオンの女はぶどうそのの庵のごとく瓜田の仮舎のごとく、また囲みをうけたる城のごとく、唯だひとり遺れり。



「シオンの女」というのはエルサレムのことです。エルサレムが孤立してしまつて、後は荒廃に帰したというわけです。

9 万軍のエホバわれらに少しの遺りをとどめ給うことなくば我等はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん。

もう少しで全滅のところだったと。「ソドム、ゴモラ」というのは創世記に出ている昔の乱れた町のことです。

10 なんじらソドムの有司よ、エホバの言をきけ、なんじらゴモラの民よ、われらの神の律法に耳をかたむけよ。

エルサレムのことを「ソドム、ゴモラ」と言っている。「有司」とは、社会的に上の方の政治家たちのことをいう。

11 エホバ言いたまわく、なんじらが献ぐるおおくの犠牲はわれに何の益あらんや。

表向き宗教的なことをやっているけれども、それは何だ、偽善だと。

我はおひつじの燔祭とこえたるものの膏とにあけり。われは牡牛あるいは小羊あるいは牡山羊の血をよろこばず。

そんな犠牲の燔祭や宗教儀式はよしてくれと。

12 なんじらは我に見えんとてきたる。このことを誰がなんじらに要めしや。徒らにわが庭をふむのみなり。

随分、反語的な皮肉った言い方です。

「誰が来いなんて言ったか。本当の生活をしてないで、そんな宗教行事をやったつて何になるか。本当の宗教生活とはそんなものではないぞ」

と。「庭」とは神殿の庭です。

13 むなしき祭物をふたたび携うることなかれ。燻物はわがにくむところ、新月および安息日また会衆をよびあつむることも我がにくむところなり。

「新月」とは毎月の1日のことです。そのような事は、外側は形式的にやっているけれどもダメだと。

なんじらは聖会に悪を兼ね。われ容すにたえず。14 わが心はなんじらの新月と節会とをきらう。

贖罪の日だとか、いろいろなことがレビ記23章に書いてあります。

是わが重荷なり。われ負うにうみたり。

そんなものは重荷だと。非常にずばりと云っている。

「我は担うのにあきてしまった、そんなのはごめんだ」

と。こういう預言書の言葉は、今の世界の各国の、あるいは社会の事情を預言者がまた語っているようなわけで、その意味においては、預言書というものは非常に大事です。現代



の政治社会のいろいろな在り方に対して、預言者が鋭く批判している。

●雪のごとく白くなせ

¹⁵我なんじらが手をのぶるとき

ユダヤ人は祈るときによく手を挙げて祈りますから、そのことです。「手をあげて祈ったつて、もう目をおおって見ないぞ」と。

目をおおい、汝等がおおくの祈禱^{いのり}をなすときも聞くことをせじ。なんじらの手には血みちたり。

「人殺しなんかやっていて、祈ったつてダメではないか」と。

¹⁶なんじら己をあらいい己をきよくし、わが眼前よりその悪業^{あしわざ}をさり、悪をおこなうことを止め、¹⁷善をおこなうことをならい、公平をもとめ、虐げらるる者をたすけ、孤子^{みなしご}に公平をおこない、寡婦^{やもめ}の訟^{うったえ}をあげつらえ。

「公平」とよく訳してありますが、この字は「審判」(ミシュパート)という字です。あの士師記(シヨーフエティム)というのは「さばきびと」という意味です。具体的に正しい審判をするところの政治のことをいうわけです。「公平を求める」とは、

「正しい審判が行われている正しい政治を、審判を、裁判を、それを具体的に自分は求めているんだ、それを要求するぞ」

ということです。「公平」というのは決して観念的な言葉ではない。

「虐げらるる者をたすけ」

はヘブライ語の読み方では、

「虐げる者をただす」

とも読める。虐げる者のその在り方を正してやる。母音の付けかたで、能動になったり受動になったりするから、ヘブライ語というのは困る。

「孤児に本当の審判を行い、寡婦の訴えをあげつらってもらいたい。そういうことをしないで、ただ宗教的に勤行したつて何になるか、そんなものは受けとらないぞ」と、散々言っているわけです。

「間違った宗教はダメだ、実存が大事だ、神さま相手の生き方が大事だ」

と、預言者が特に支配階級に、政治家たちや祭司たちに対してこっぴどく語っているわけです。預言者はいつもそういった孤独な戦いをしている。

¹⁸エホバいいたまわく、いざわれらともに論^{あげつ}らわん。なんじらの罪は緋^ひのごとくなるも雪のごとく白くなり、紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん。

と訳してありますが、これはむしろ、

「雪のごとく白くなせ、羊の毛のごとくにせよ」



と訳すべきです。

「そのようにする」

と訳すと、これは福音的な恵みになる。新約の光ではそのように読みかえても構わないけれども、本来、預言者の言葉は――「緋」「紅」というのは染料で、なかなか色が変わらな

い――
「罪は染料の緋のようであるが、それを雪のようにしてみる。紅という染料の色であるが、そんなに赤くても羊の毛のように白くしてみろ」

というわけです。ということは、外側の話ではない、体裁をつくるのではない。外側の現象ではない。内側のことです。黒が白になったり赤が白になったり、要するに「白」を非常に要求しているわけです。色のつかないもの、罪無き世界、無色透明の世界です。我々はそれができない。

福音になると――

「雪よりも白くせよ」

というような讃美歌がありますね――そのようにキリストは私たちに白き衣を着せてくださる。即ち、神さまが初め造られた神の似姿に白く輝く。これは福音の、キリストの贖罪と聖霊によってそうなっていく。この言葉をそういったように福音的に読みかえて、新約的につかうことは一向差し支えありませんけれども、もとはそういうことです。

19 若しなんじら^{うけが}肯いたがわば^{よきもの}地の美産をくらうことを得べし。20 もし汝等こ

ばみそむかば剣にのまるべし。此はエホバその御口よりかたりたまえるなり。

「神さまの言葉に『はいっ』と言って従うならば地のよきものを食らうことができろぞ、もし神の言葉を拒むならば敵がやって来てやつつけられるぞ」

と。皆さんは何も心配は要らない。キリストの贖いを本当に受けとると、私たちはあの変貌の山のように、姿があるけれども見えないような姿に本質的にはされているわけです。

私は、十字架でたまわいたる無の境地を冥想していると、もう何とも言えなくなってしまう。とても表現できない。聖霊がグーッと貫いてきますから。そうすると、こちら側の実存ということではない。

そういうことで、皆さんは、

「雪よりも白く、羊の毛よりも白く」

本質的にはされているんです。絶対恩寵は本当に即、無条件に受けとっていくことです。こういう無条件の境地というのは、何と言おうか私はもう、……ちよつと異言が出そうだし、イザヤのこの言葉は、

「白くせよと言ったってできません。雪のごとく白くしてください。いや、白くしてくださいました」

と言って、キリストに感謝するだけです。



●義しき審判と義

21節から26節はちよつとエレミヤ哀歌に似たようなところです。

21 忠信なりし邑まちいかにして妓女うかれめとはなれる。昔は公平にてみち正義その中にやどりしに、今は人をころす者ばかりとなりぬ。

これは随分、強い言い方だ。「忠信」という字は「アーメン」という字からきている。

「アブラハム、エホバを信ず」

という。信ずるとは「アーメンとする」ということです。信とは「アーメン」という字です。まことということで、これは絶対に裏切らない。忠犬ハチ公みたいに。

「昔はアーメンであつたところの邑であつたのに、どうして妓女となつたか」

ということです。「公平」とは正しき審判のことです。「正義」は「義」と訳した方がいい。「正義」というと、なにか徳目の一つみたいですが、でも、「義」というのは非常に内容の深い表現になりますから。

「アブラハムはエホバにアーメンと言いました。そうしたら、神さまは彼を義としました」

と、これが「信」「義」なんです。神さまに対してアーメンと言ったら、義をたまわるんです。神さまに「アーメン」と言うことは、

「私の方はダメです。あなたが一切です。こっちはゼロです」

ということ。自分を全然無くしていることが義なんです。「無義の義」ということを親鸞が言つたけれども。

「昔は本当の審判と正しさがちゃんと行われていたのに、また義が宿っていたのに、今は人殺しをやっている」

と。「公平と正義」はいつも対句になつて出てくる。義しき審判と義なんです。マルチン・ルターは、

「神の義は福音に現れた」

という「義」は、神さまの方からそれをたまわる義であることに気がついた。

22 なんじの白銀は滓かすとなり、なんじの葡萄酒は水をまじえ、
23 なんじの長輩はそむきて盗人の伴侶となり、おのおの賄賂をよろこび、
24 臙脂おくりものをおいもとめ、

25 孤子みなしこに公平をおこなわず、
26 寡婦やもめの訟うったえはかれらの前にいづること能わず。
「孤子と寡婦」という言葉もよく出てくる。

24 このゆえに主万軍のエホバ、イスラエルの全能者のたまわく、ああわれ敵にむかいて念おもひをはらし、仇にむかいて報いをすべし。

「敵」というのは、エルサレムのけしからん支配者のことをいう。

25 我また手をなんじの上にそえ、なんじの滓をことごとく浄くし、なんじの鉛をすべて取り去り、
26 なんじの審士を旧のごとく、なんじの議官を始めの



「ごくくに復すべし。然るのちなんじは正義の邑^{まち}忠信の邑となえられん。
「もし戻るならば、罪を取り去るならば、汝は義の邑忠信の邑となえられん」
ということですよ。

● 帰り来るもの

27 シオンは公平をもてあがなわれ、帰り来るものも正義をもて贖^{きた}わるべし。
これは素晴らしい言葉だ。

「シオンは審判をもて贖^{きた}われ、帰り来るものも義をもつて」

という。エルサレムは義しい審判でもつて贖^{きた}われる。これはどうしても新約の角度から読まなければ出てきません。

「帰り来るもの^{きた}」

ということが大事です。我々の実存は帰り来たること、帰り行くこと、それだけなんです。

「汝ら悔い改めよとキリストが言われたときに、クリスチャンの一生は悔い改めである」

と、マルチン・ルターが九五箇条の第一条で言った。ルターは「悔い改めよ」と訳したけれども、私は、

「帰り来よ、帰って行け」

と訳した方がいいとルターさんに言いたいところだ。

彼は偉くたって、私は親しいから、「さん」なんて付けてしまう。本当に偉いのはキリストだけです。キリストも「偉い」なんて仰らない。

「なぜ私のことを善いと言うか、偉いと言うか。神さまの他に善いものがあるか」

と、キリストに叱られるよ。イエスというひとは大変なひとだ。また、本当にうれしいね、自分を何ものもしないから。それで、神の中に彼は飛び込んだから、凄いいことになってしまった。何でもないんだ、この信仰の世界は。飛び込まないんだ、みんなは。帰り行かないから、帰入しないから。入らなくてはいかん。

27 シオンは公平をもてあがなわれ、帰り来るものも正義をもて贖^{きた}わるべし。

27節は非常に大事な言葉のひとつです。「シオンは、東京は、京都は……」というわけだ、どこの町でもいい、それは

「義しい審判をもつて贖^{きた}われる」

審判で贖^{きた}われるとはどういうことですか。ヘタすると、審判で罰されるんだ。愛のために義のために、涙を流し苦しみ、血を流した人たちがたくさんある。そういう人たちのために、

「本当の審判をして贖^{きた}いとしてやる」

と、本来はそういう意味なんです。それから、



「罪びとをも本当に帰り来たるならば全部贖いとる」

と。その「帰り来たるもの」にかかつてくるわけです。「シオン」は帰り来たるものでなく
てはいかん、というわけです。「シオン」と「帰り来たるもの」、「公平」と「義」、全部それ
が「贖われる」にかかるわけです。そういう対句になっている。

東京は帰り来たるものでなくてはいかん。京都も帰り来たるものでなくてはいかん。我々
は神さまの中に、キリストの中に帰入する。中に入ってしまう。内接円です、外側ではダメだ。
十字架という門を通して、中に入るわけです。

「エホバはわが避所なり」

という。マルチン・ルターはワルトブルクが避所にされた。ルターの新約聖書はその中で
できた。

私は「悔い改め」という言葉よりも

「帰り来る、帰り行く」

という方がはるかに適切だと思う。「悔い改め」とは、心がちよつと悔いて改めるなんてい
うことではダメだ。全存在でもって帰り行くことです。これは非常に積極的な明るい言葉
です。今、全世界が、神に仏に如来に帰り行かなければ。それが本当の前進である。

「信仰とは帰り行くことなり」

と、はつきり言います。

「キリストは神の懐にあった」

とあるではないですか。祈る場合は、即ちキリストの懐の中である。だから、その懐の中
で主を中心にして祈っていることは全部きかれる。現象面がどうであろうと、結果がどうで
あろうと、そんなことは心配することはない。そんなことを心配するのは御利益という。

「もう根元現実では聞かれているとせよ」

とキリストは言つてらっしゃる。事実、いくらでもその先は現象する。私も何回、そのい
ろいろな現象を見たかしらん。私の無教会時代には現象はひとつも起きない。本当の現実
でないから。間違っているとは言わん。ただ、使徒たちの、預言者たちの次元とは違ふと
いうことです。

●審判によって贖われる

どうぞ、皆さん、我々はもうギリギリの現実になりましたから、その「即」の現実に入らなかつ
たらつまらんです。我々の存在の意味と使命はそこにあります。人のことはどうでもいい。
その意味と使命に生きなかつたらつまらんものな。そして、

「来りて見よ」

だ。具体的に本当にやりなさいよ、

「何でもいいから来なさい。聞いてみる。それで嫌になったら出て行つたつていい



よ

と。私は人が来るも出るも任せていますから。人数がどうだなんて、そんなことは思っていないません。

27節は、シオンはキリストの審判をもつて贖われる。キリストの審判は、キリスト自身が今度は審かれてしまった。それが十字架なんです。ミシュパートの、審判の一番凄いすがたがこの十字架なんです。我々に代わって審判を受けてしまった。だから、

「審判によって贖われる」

というイザヤ1章27節の審判というのは、福音で十字架をもつて贖われる。私たちは十字架の審判をもつて贖われました。キリストの中に帰り来たるものは、彼の義をもつて贖い取られる。はつきりそうです。これは素晴らしい言葉だ。

「帰り来たるもの」とは、ヘブライ語では「彼女の帰還は」と書いてある。

「シューブ」

という字からきている。「シューブ」というのは方向転換して帰ることです。

「シオンは審判をもつて贖われ、帰り来たる者は義をもつて贖われる」

日本は、世界は、キリストの十字架の審判をもつて贖われ、キリストに帰り来たるものは義をもつて贖われる。キリストの義を賜る。これは福音だ。

「神の義は福音に現れる」

という。イザヤ1章27節はそれだけの深い福音を約束された言葉です。絶対に忘れないでください。

28 ^{とが}されど愆をおかすものと罪人とはともに敗れ、エホバをすつる者もまた亡びうせん。

「愆を犯すもの」とは何か。そのもとは「エホバをすてる」です。神さまから背き、神さまを棄てる。これは罪の罪たるところです。

「我執」というのが「罪」です。自分に捕らわれているエゴイズムです。なぜ、エゴイズムになるかというと、神さまから離れて棄ててしまったからです。一番の罪の原因は離れるところにある。離れそむくと我執になる。不信が罪の最大なるものです。その結果が我執になる。

29 節からあとは偶像崇拜のことが書いてある。

29 ^{はじあから}なんじらはその喜びたる^{かしのき}檀樹によりて恥をいただき、そのえらびたる園によりて慙^{はじあから}赧むべし。

木を拝んだりしていた。

30 ^いなんじらは葉のかるる^{わさ}檀樹のごとく、水なき園のごとくならん。31 ^い権勢あるものは麻のごとく、その工は火花のごとく、二つのもの一同もえてこれを^{うちけ}撲滅すものなし。



●預言者の心

イザヤ書2章に入ります。

¹アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかかる言。
ユダの国、即ちその中心はエルサレムです。

²すえの日に

「すえの日」とか「かの日」とか、いろいろな言い方をしますが、これは終末のこと、最後の審判のことです。

エホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅く立ち、

「エホバの家の山」とはシオン、エルサレムのことです。

もろもろの嶺^{みね}よりもたかく挙がり、すべての国は流れのごとく之につかん。
素晴らしい幻みたいだ。

³おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道をおしえ給わん、われらその路をあゆむべしと。そは律法はシオンよりいでエホバの言はエルサレムより出づべければなり。

「ヤコブの神の家」とは神殿のことです。「律法」と「エホバの言」、「シオン」と「エルサレム」が対句になっている。エルサレム中心で、万国の平和はそこに来るというわけです。律法はもともと成文律みたいになっているけれども、律法を活ける神の言としてとらなると、いわゆる律法に捕らわれた「律法の義」ということになる。

⁴エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん(審きたまわん)。

ここにはつきり出ている。

斯てかれらはその剣^{つるぎ}をうちかえて鋤^{すき}となし、その鎗^{やり}をうちかえて鎌となし、
国は国にむかいて剣^{つるぎ}をあげず、戦闘^{たたかい}のことを再びまなばざるべし。

終末のときはそうだと。こういうことは詩篇46篇だの、ミカ書にでています。けれども、「剣をうちかえて鋤となし云々」という、それだけのことはなかなか来ない。

「律法はシオンよりいでエホバの言はエルサレムより出づ」

というくらい、旧約ではエルサレム中心、律法中心であるわけです。そして、

「本当の平和がくる。剣は鎌に変えて農業をやる。戦闘のことを再びまなばざるべし」

という。そういう理想郷を、終末の世界を、忌憚^{きたん}なくこうやって語っているわけです。預言者というのは非常にコントラストが強い。片一方では、亡びのことを言ってひどい暗黒の状態を言うかとおもうと、今度は、光の世界を、平安の世界を、終末の世界を預言している。ということは、預言者がいかにいわゆる常識の人ではないかということです。問題は、



「神に本当に帰ればそうなるぞ」

と、神さまも預言者もそういうときを本当に待ち望んでいる。これが預言者の心なんです。呻きであると同時に、本当に大希望を掲げている。預言者というのは非常にドラマティックなんです。

「段階的に段々よくなる」

なんていうのではない。滅びがくるか、神の国がくるか、どちらかだ。世界の歴史は段々よくなるはしない。ひっくり返って本当に神の国になるか。

私たちは神の国の者らしく生きなかつたら、つまらん。そういうように生きたならば、どんなに迫害されようが、結果がみじめだろうが、絶対に負けない。いろいろなことに遇えばあうほど逆に信仰は強くされていく。絶対にへこたれない。本当ですよ、皆さん、いろいろなことに遇ってもそうですから。そういうように、預言者の言は非常にドラマティックなコントラストがある。白か黒かというわけです。我々は本当に内側から雪よりも白くされています。

白はまた、一切の色を含んでいる。白はいろいろな色に変わることができる。水が一番おいしい。それはいろいろな味がつけられる。だから、無色、無の世界が一番無限無量だというわけです。

●聖霊の権威

6節からは驕^{おご}りの世界だ。4章までずっと続いています。例えば、

17 この日には高ぶる者はかがめられ、驕^{おご}る人はひくくせられん、唯エホバの

み高くあげられ給わん。

18 かくて偶像はことごとく亡びうすべし。

とある。そういうときが来なければダメだと。

「経済大国」なんて言われると、みな調子がよくなってしまつて、内側が段々ダメになっていく。そして、軍備なんか始めたりする。昔、「富国強兵」なんていう言葉があつた。国が富んで経済的に豊かになって、そして強い兵隊をもつ。私たち明治の人間はよく聞かされた、それがいいかと思つて。それでひっくり返ってしまった。

「王」という字はおもしろい。横の三本の線は天・地・人なんです。それが一貫に貫く(縦の線)。これは孝経というシナの文献に書いてある。天地人を貫いたような人が民を治めるのが本当の王者であるという。さすがは漢民族は素晴らしい。何と云つたつて、漢字は世界最高の文字です。

今は、預言者的精神の政治家が出てこなければダメです。福音を受けとつて、そういう人が現れてもらいたいものです。いくら栄えても、その栄えは神さまの前に平伏すまではダメです。



「高ぶる者はかがめられ、驕る人はひくくせられ、唯エホバのみ高くあげられる」

ようにならなければ、いわゆる富国強兵になったつてダメだということです。22節に、²²なんじら鼻より息のいでいりをする人に倚^よることをやめよ、斯^{しか}るものは何ぞかぞうるに足らん。

と面白い言葉が書いてある。ヨブ記にも似たような言葉があったと思う。

「人ではないぞ、神さまだぞ」ということです。

西郷南洲は天を相手とする天人であつた。政治家と軍人が一番悪いことをしている。

「世界の惨憺たる歴史を展開していくものは、政治家と軍人だ」

グラッドストーンもそう言っている。

「政治家というのは本当に悪い」

ということ。政治屋だな、それは。グラッドストーンだの、ビスマルクだの、リンカーンだの、ああいう政治家はちがう。ビスマルクは、

「我々ドイツ人は神さまを畏れて、その他に世界で何ものをも恐れない」

と言った。これは有名な演説の言葉です。ビスマルクもしょっちゅう聖書を読みました。グラッドストーンもそうです。リンカーンもそうです。結局みんな、本当に聖書が身についている人たちです。何をやっていても、これがもう土台ですよ。

「すべての本の中の本、聖書は本のうちの本だ」

とゲーテもそう言いました。なぜ、そうかという、これは本当に神の霊の霊言であるからです。人間のいかなる思想もかなわないよ。

「預言者の思想」

だなんて、「思想」ではない。「思想」なんていう言い方をよくするけれども、「ゲダンケ」(思想)ではない。「オッフエンバールング」(啓示)です。神の根源の言葉です。

だから、そういうものを身に持っている者が反つて本当に世を治めるといふ。非常に、

「現実にはありえないけれども、これが本当なんだ」

ということを4節が言っているわけです。詩篇2篇にもちよつと似たような言葉があつたですね。

真理の世界は、年齢のいかんを問わず、社会的地位のいかんを問わず、男女のいかんを問わず、そういう聖霊の権威というものがそこにある。それは本当にキリストの前に平伏している魂にそれが来る。驕り高ぶつたら、霊的傲慢になったら、これはまた大変な罪になる。サタンの虜^{とりこ}になりますからね。



●遺れる者

あとはいいです、ずっと。あとは大したことないです、ゴタゴタいろんなことが書いてあるけれども。16節からあとは、なにかかなり、いわゆる有閑マダムみたいな連中の飾りのことが書いてあるな(笑)。預言者はよく調べているね。私は分からないよ、こういうことは。よく見ているんだな。耳輪がどうだ、腕輪がどうだ、顔覆いがどうだなんて。

4章1節に妙なことが書いてある。

1その日七人のおんな一人の男にすがりていわん、我らおのれの糧をくら
い己のころもを着るべし、ただ我らになんじの名をとなうることを許してわ
れらの恥をとりのぞけと。

なんて、聖書にはおもしろいことが書いてあるよ。それはみんな、そういった、どうしても
ならなくなって、そして、しがみついてくる、というような言い方なんだな。
その次の2節からはまた非常にうるわしいところで、今日の最後のところですよ。

2その日エホバの枝はさかえて輝かん。

「その日」というのはやはり、最後の審判のあとですね。本当の神の末の日のことです。「末
の日」とか、「その日」とか、そういう言い方のときはみんなそうなんです。

地よりなりいずるものの実はずぐれ並^{また}うるわしくして逃れのこれるイスラエ
ルの益となるべし。

神さまの御怒りから逃れのこれる者、

3而してシオンに遣れるもの

「遣れる」というのはよく出てきますね。

エルサレムにとどまれる者すべて此等のエルサレムに存^{ながら}うる者のなかに録さ
れたるものは聖となえられん。

これは非常に著しい言葉ですね。

「聖となえられん」

と書いてある。「聖」「カードーシュ」。昨日も申し上げた、その「遣れる者」ですね。神さ
まへの信を貫いて、そして遣った者。神の福音を継ぐべく遣された者。選ばれたる人た
ちです。それは「聖となえられん」という。

イザヤ書60章14節に、

「¹⁴汝を苦しめたるものの子輩はかがみて汝にきたり汝をさげしめたる者はこ
とごとくなんじの足下にふし斯て汝をエホバの都イスラエルの聖者のシオン
となえん。」(イザヤ60・14)

と。これは「イスラエルの聖者のシオンとなえん」か。要するに、イスラエルの聖者は
エホバの神さまに属するものであるから、「聖となえられん」というわけです。

私たちも、そういう意味では、「聖徒」なんです。カトリックでは、特に「聖者」という



ようなことを言うようだけれども。我々は、信徒、聖徒。まあ、こんな言葉は滅多に使いたくないですけれども。絶対恩寵によつて聖とされている者、これが聖徒です。

●エン・クリスト

その4節に、

4 そは主さばきするみたまと焼きつくす^{みたま}霊とをもてシオンのむすめらの汚^{けがれ}を
あらうエルサレムの血をその中よりのぞきたもう期^{とき}きたるべければなり。

と。「さばきする」も、「焼きつくす」も、同じことだ。その御霊をもつて。昨日も言いましたね、

「火が審判と同時に恩恵である」

ということ。罪を火で焼きつくしながら、聖霊を与える。聖霊は火に譬えられる。まあ、そこまではつきりとまだ旧約には出てきませんが、そういう意味です、新約の光で読むなら。

5 爰^{ここ}にエホバはシオンの山のすべての住所^{すまい}ともろもろの聚會^{あつまり}とのうえに昼は
雲と煙とをつくり夜はほのおの光をつくり給わん。

出エジプト記に出てくるね。「雲の柱、火の柱」というやつ。「シエキナー」と言うんですが、
霊雲です。霊雲が漂う。霊光が漂う。

あまねく^{さかえ}栄^{さかえ}のうえに覆庇^{おおい}あるべし。6 また一つの仮廬^{かりいお}
幕屋です。

ありて昼はあつさをふせぐ陰となり暴風^{はやち}と雨とをさけてかくるる所となるべし。

非常に恵みの事態を言ってるわけだな。要するに、

「立ち帰れば、そういうときが来る。どこまでも遺れる者となれ」

と。生き残るということではないですよ、この

「遺れる者」

というのは。神の民として信を貫く者が「遺れる者」なんです。信、愛、一貫、というわけです。信愛一貫の者。アーメンを貫く者。忠信を貫く者。キリストの義、愛に生き抜く者。それがみんな「遺れる者」です。でなければ「遺れる者」とは言えない。

「たとえば、最後の一人となろうとも」

と、皆さんはそういうつもりでやってください。

「もう俺もいい加減で止めよう」

なんてでは絶対にダメです。そういう信愛一貫とか、忠信とかは、みんなこれはキリストと一如になっていなければ、その一貫は成り立たない。一如になっていなければ。だから、

「エン・クリスト」

という。「エン・クリスト」とはいい掲げだったね。



私は、英語の本で一番先に――ほとんど一番先と言っていいでしょうね――旧制高等学校のときにアンドリュー・マーレーというひとの『イン・クライスト』という本を読んだんです。今思うと、本当に不思議だな。途中でやめてしまったけれどもね。まだそのときはダメだった。聖霊の世界ではないものだからね。これを読んでも分からない。けれども、この本に触れたことは覚えてます。

ただ今の集会で一番中心になるものはこれですから。

「シオンは、キリストの十字架で受けられた彼の審判をもって贖われ、キリストに帰り来たる者は、そのキリストの義をもつて贖われて、私たちはそのような義人にされて進んで行く」というわけです。

● 祈り

あとは祈ります。全身をもつて全身で祈ってくださいよ。その前に、ちよつと私は新約聖書を一カ所読みます。エペソ書一章、

「³讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、⁴御前にて潔く暇なからしめん為に、世の創より我等をキリストの中に選び、⁵御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。⁶是その愛しみ給う者によりて我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり。⁷我らは彼にありて恩恵の富に随い、その血によりて贖罪、すなわち罪の赦を得たり。⁸神は我らに諸般の智慧と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、⁹御意の奥義を御意のままに示し給えり。¹⁰即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う。

10節は凄い言葉です。

これ自ら定め給いし所なり。¹¹我らは凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業と為られたり。

たくさん出ているね、この「キリストに在りて」が。

¹²これ夙よりキリストに希望を置きし我らが神の栄光の誉れとならん為なり。¹³汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。」（エペソ1:3～13）

と。……（以下録音切れ）……

